大東亞[[1]](#footnote-1)

香山光郎

筧朱美は、二階の父の書齋を片付けてゐた。朱美は、姉さん被りも甲斐々々しく、書棚や、机や、違ひ棚や、ぱたぱたとはたいてゐた。南の縁側からは、近衛騎兵聯隊の森が見え、體を少し、手摺から乗り出さうものなら、聯隊正門の歩哨さへ見える。朱美が、緣側に雜巾を掛けてゐると、パチパチと聯隊裏の、射撃場で、兵隊たちの實彈射撃の音が朝の靜けさを破つて聞えて來た。

「いゝお天氣だ。菊のお節句だもの」

朱美は、丈延びをしながら、富士が見えさうだとよく晴れた、西北の方の空に眼を馳せた。朱美の頭の中には、范于生の姿が、ちらつと過ぎた。

「范さんは、今どうしてゐるのだらう」

朱美は、別れてから、足掛け年になる、范于生のことを忘れたことはない。

范が、歸國の時、驛まで送つて出た、朱美に

「お嬢さん。僕は貴女を信じます。愛するといふよりも、信ずるといひたいのです。僕は、今祖國へ歸るのです。貴女の祖國の敵となつた祖國へ歸るのです。僕は辛い。あなたと別れるのも辛いが、それよりも敵となつてはならないはづの、支那と日本とが敵となつて戰つてゐるのが辛いのです。しかし、僕は、國民としての義務がある。それで歸るのです。でも僕は信じます。筧先生がおつしやつたやうに、アジヤは一つです、どんな曲折があるにしても、それは一時的のもので、結局は、アジヤは一つになる。それがアジヤ諸民族の運命である、とおつしやつた、おことばを僕は信じます。それでも、當分はぼくはあなたと離れねばならない。僕は祖國へ歸ります。しかし、朱美さん――失禮ですが、朱美さんと呼ばせてください。朱美さん。僕はあなたを信じます。日本女性を信ずるから、朱美さんを信ずるのです。いや、むしろ朱美さんを信ずるから、日本女性を信ずると、いつた方が、僕のほんたうの氣持でせう。僕は、この戰爭に生き殘つたら、必らず東京へ歸ります。朱美さんに歸ります。いゝでせう。あなたは、僕を信じて下さるでせう」

といつたことを、彼女は忘れることが出來ない。范が朱美に、こんな馴いこと、しかも愛情の告白に似たことをいつたのは始めてなので、朱美は、むしろ面喰つて當惑したのであるが、その時の范の眞劍さに、逆らふことも出來なかつたし、また逆らひたくもなかつた。それで、朱美は

「ええ、信じます。きつときつとあなたのお歸りをお待ちしますわ。平和の日が來たら、わたくしたちの日も、きつと」

と、誓つたものであつた。

それ以来、五年である。

朱美は、二階の、父の書齋の掃除をする時には、いつも、必らず、范を憶ひ出す。それはこの書齋で、于生たち、支那の留學生等が、毎週一回は必らず集まつたからである。支那人學生を、筧博士に連れて來るのは、實に范であつて、范は彼等の中の指導者格であつた。

朱美の父、筧和夫は、もと上海の東亞同文書院の教授であつたが、支那事變の戰火が、上海に及ぶや、當分といふ條件で、早稲田大學に聘せられて、東洋史を講ずることになつたのである。范于生は實に、筧教授の家族が、上海にゐた時からの知りあひで、范于生が、東京に來たのも、筧教授を慕つてゞあつた。

范の父鶴鳴は、セントヂヨンズ大學の支那史と、支那文學の教授であつた。彼は、アメリカで教育されたものだが、舊家の出であり、彼の父が、康有爲の門人であつたからでもあらう、支那の學問を闡明することを己の任としてゐたし、孫文の崇拜者であることはいふまでもなかつた。そのために、アメリカ歸りでありながらも、東洋的な情調や風格を多分にもつてゐた。范教授は、筧教授の著書「周禮と支那の國民性」といふのに心醉して、筧教授の門を叩いたのであつた。

「眞の支那の心を知る者は筧教授である」

とまで、范教授は支那の或雜誌に激賞したのであるが、筧教授と交はるに及んで、范教授は、日本人の心といふものに觸れ

「支那では死滅した禮が、日本には生きて榮えてゐる」

といふやうなことを雜誌に書いたので、排斥され危くセントヂヨンズ大學を罷めるところであつたが、ビツト教授が

「范教授は良心的な學者である。學者が自分の信念を率直に發表したるが故に、教授の職を奪はれたとあつては、本大學の恥であり、學への侮辱である」

と、辧護して、やつと首にならずに濟んだ。

しかし、眞理に忠實な、范教授は、同僚や同胞たちに後指さゝれるのも意に介せず、益々筧博士と親交を結び、日本の歴史、文學などの研究を思ひ立つた。また筧博士を通して、日本の、國家的理想や、東亞に對する、不變の國策などを聞き、また、日本の學者や名士と交遊することに努めたのであつた。

そこで、筧、范兩教授の個人的親交は、兩家の家族的親交となつて現はれ、朱美が最初に支那人の家庭に足を入れたのは、范教授の、靜安寺路の家であつた。

范于生や、その姉の范少姓が、筧博士の家庭に於いて、日本の家庭の美しさを見たと同じく、朱美も、范の家庭に於いて、支那の美しさを見せられた。實際、朱美は、范の家庭を見る時までは、支那は汚いところ、支那人は汚い人種といつたやうな、輕蔑した感情しかもつてゐなかつたのである。ところが、范の家庭を見るに及んで、始めて、支那の傳統古き、磨き上げられた、文化に接することが出來た。それは、薄つぺらな、唯物的な、西洋の壯麗さではなくて、牡丹の薫のやうな、またその色のやうな、盡きせぬ味のある、奥行き深いものであつた。

朱美は、支那人の娘たちの學んでゐる學校で勉強して見たいと思つた。支那に深い興味を持ち、日本、支那兩民族相互の理解と愛情こそ、東亞永遠の平和の基礎であると信じて居る筧博士は、喜んで、朱美の請を容れて、朱美は、范の姉が教へてゐる、セントマリズコレツヂに入學したのであつた。朱美はこの學校に入った、最初の日本人なので、生徒たちは、仲々朱美に氣を許してくれなかつた。しかも、當時は、日支關係が一觸卽發の險惡な狀態にあつた時だから、日本女性が、この學校に入つたのは、スパイが目的だとさへいはれたものである。

かの蘆溝橋事件が起つてからは、上海でも、日本人で、支那人から暴行を加へられるものも出た。朱美が、虹口の家から上海の西外れの、學校まで往復することは、たしかに冒險であつたが、朱美は、それを恐れて、學校を休みはしなかつた。日支關係が險惡になればなるほど、一人でも多くの支那人に、日本を知らせなければならない。日本が、戰爭で支那に勝つても、心で支那を失つたんでは、何にもならない。眞の日本を理解する一人の支那人を造ることは、一城を占領すること以上の勝利である――朱美は、父博士の口吻を眞似て、かう腹に考へてゐた。しかし、政治的事情が、かう切迫してゐると、朱美の心からの好意も、仲々、支那人の同窓には通じなかつた。支那人は、女學生までも、政治的關心は深く、ことに日本に對しては、激しい敵愾心を抱いてゐるのであつた。彼女たちは、外人の教授たちには、親の如く懐き、且信頼しながら、同種同文には敵意と[猜]疑の眼を向けるのを見ると、情なくもあり、憤ろしくもあつた。

「しかし、わたしは、腹を立てゝはならない。匙を投げてもならない。わたしが眞心をこめて、彼女たちに向ける一言一行は、必らずや、種子となつて、彼女たちの心の土に落ちるであらう。それが、いつかは、芽を吹くに違ひない。[」]わづか十八娘の朱美は、雄々しくも、かういふ風に考へてゐた。それは、敵のさ中にあるが故に、切實に祖國の安危が、この小娘の胸に感ぜられたのである。

かうしてゐる中に、戰火が上海に及ぶことは、免れぬ事情となつた。同文書院は、當局の命によつて閉鎖され、筧教授一家は、東京へ引揚げることになつたのである。いよいよ出發といふ日の前の晩、夜蔭に乗じて、范教授は、その子范于生を同伴、筧教授の家を訪れた。

「どうしたんです、范さん。危險ぢやありませぬか」

筧博士は、范教授の手を、キユツと握りしめながら心配さうな顔をしてゐた。

「危險でせう。しかしこれも戰爭です。筧先生、私は遠からず、支那には東亞の大勢に眼醒めた大人物が現はれて、兩國間には平和な日の來ることを信じます。しかし、それは杵を流すほどの血が流れて後でせう。まつたく不幸なことです。私はこの國の國民の一人として、誰が惡い、誰に責任があるとは申されませぬ。結局は、私自身が惡いのです。私は、あなたにお詫びを申上げます」

と、范教授はいたく興奮はしてゐたが、學者的沈着を全然失ひはしなかつた。

范教授の眞摯な態度やことばに、朱美は、眼頭が熱くなるのを感じた。

范教授がいひ終ると、筧博士は叮嚀に低頭した。

「御心情はよく解ります。私たちは學者です。學者は永遠の眞理に生きる。一時的の現實に囚はれてはなりませぬ。學者が眞理を見失ふことは、戰爭よりも不幸なことです。私はアジヤは一つなりを固く信じます。あなたも偉大な孫中山先生と同様、この點で、私に共鳴されていらつしやる。私たちは、このアジヤの心、アジヤの魂を窒息させないやうに、最善の努力を致しませう。私は、日本人の中に、あなたは、中華人の中に、この心をしつかり植ゑつけませう」

と、いひ終つて、筧博士は、椅子から立ち上つて、手を差し出した。范教授は、立ち上りざま、兩手で、筧博士の手を固く握つて嗚咽した。筧博士の眼からも涙が流れた。朱美は、二人の様子を見ると、感激で、胸が張り裂けるやうであつた。朱美は、支那人は、天性至つて冷静なものとのみ思つてゐた。ことに、范博士は、決して、平生、熱情を現はさなかつた。彼は至つて慇懃であつたが、その顔は無表情といひたいほどであつた。支那の人は情熱を窒息させてしまつて居ると、誰かゞいつたのは本當のやうに思はれた。時々熱情を爆發させる父を見馴れた朱美には范教授の冷静さが、小面憎い程であつた。それがこの嗚咽である。この嗚咽が朱美を顚倒させるほど感激させたのであつた。

二人の學者は、手を握つては振り、握りかへしては振りしながら、お互に、相手の涙に濡れた眼を見詰めてゐた。この光景を、蒋介石一派のものに見せたかつたと、後で朱美は范于生に話したことがある。

「筧先生。どうぞ、伜をお預かり願ひます。伜に眞の日本、日本のほんたうの姿を見せたいのです。そして學ばせたいのです。われわれ中華人が日本を正しく認識するところに、アジのすべての不幸から逃れる道があるものと信じます。至つて魯鈍なものではありますが、差當り、私の志を繼がせるものはこれしかありませぬ。これも、先生を慕つて居りますから、どうぞ東京へ連れて行つて下さい。敵国人だからいけないでせうか」

范教授の顔は沈痛であつた。

「いゝえ、とんでもない。日本はお國の國民を敵とは思つてゐませぬ。日本に住んでゐる、お國の人たちは、今後といへどもいまゝで同様、日本の保護の下に安居樂業をするはづです。現にさうして居ります。よろしい。御令息はたしかにお預かり致します。及ばずながら、戰爭の終るまで、私がお世話致しませう」

かういふ譯で、范于生が、東京へ來たのであつた。

東京へ來た范于生は、筧教授の家に泊められた。年頃の娘をもつてゐる筧博士としては、外國人の青年を、家に泊めることはどうかと、思つたが、しかし、范教授のあの誠實な頼みのことを思ふと、その子を冷い下宿屋に逐ひやるわけには行かなかつた。筧夫人も、よく理解してくれてゐたし、朱美も嫌な顔は見せなかつた。そして、范教授の希望を尊重して、于生を東京帝大當局の特別の許しを得て聴講生として、國文學と國史の講義を聴くことにしたのであつた。

最初のほどは、于生は樂しさうであつたが、だんだん幽鬱になるのが、筧家の人たちの眼について來た。以前と違つて學校からの歸りが遅くなることもあり、食卓についてもだんまりこくることが多かつた。自室に入ると何をいてゐるのか、顔を出さない。

「范さん、どうしたんでせうね」

筧夫人や、朱美も心配した。

「幽鬱にならざるを得ないだらう」

筧博士は當然なことのやうに、口ではいつてゐるが、内心は穩やかではなかつた。南京が陥落して、戰勝祝賀會があつた日など于生は、工合が惡いといつては、室にひつこんでゐて、夕飯も喰はなかつたし、廊下などで、筧家の人たちに出會つても、たゞ一寸會釋をするだけで、一切口を利かなかつた。蕪湖や、九江がつゞいて陥落し、廬山の激戦が傳へられ、秋も深い十月二十九日には、漢口も陥落して、蔣介石政権は重慶の山奥へ逃げこんでしまつた。日本に於いても、蔣介石に對する敵愾心がますます深酷になり、東京に殘つてゐた支那人學生たちは、隊をなして、歸國して行くといふありさまである。この中にあつて范于生が幽鬱になるのも、筧博士のことばの如く、無理はないことであつた。

その中でも、于生のために胸を痛めてゐるのは、朱美であつた。若者の心は、同じ若者に餘計に通ずる。年からいへば、于生が二十三で、朱美が十九であつたが、女の早熟で、二十三の于生が弟でもあるやうに、朱美には思はれた。

「何とかして慰めてやりたい」

朱美は、親にも打ち明けられず、一人で惱んでゐた。

しかし、朱美は、女であり、范于生は外国人の男子である。同情するにしても、自ら限界があるはづだ。于生の机の上に、花を一輪飾つてやるとか[、]着物をきちんと畳んでやるとか、こんなこと以外にはどうしようもなかつた。

于生の方では、支那の傳統として、男女別有といふ禮儀に凝り固まつてゐるのだらう。また、自分が尊敬する師の家であつて見れば、自然と遠慮がちになるのだらう。朱美には勿論のこと、筧夫人にさへ、決して馴々しくは振舞はなかつた。しかも、日本人なら、誰でももつてゐさうな、愛想といふものも示さなかつた。于生は、實に、型に嵌まつたやうな、何かに酷く拘はつたやうな顔つき、物言ひをするので、如何にも窮屈を感じさせるのであつた。彼の眼には、いつも、不安な、警戒の色があつた。

「范さんは、ひどく神經を使つてゐる」

と、朱美は思つて、氣の毒になるほどであつた。

「君、もつと寛がぬか」

或時、皆で茶を啜りながら、夜のひとゝきを樂しんでゐた筧博士が、于生に、かういつたことがある。

「君、さう固苦しくせぬでいゝよ。君の家にゐた時と同じやうに、素直に振舞ひたまへ。家では君を家族同様に思つてゐるんだからね。もつと寛げ、寛げよ」

「はツ。どうもまだ、日本の禮儀に馴れませぬので」

于生は、はにかんだ。

「ほんとうに、范さん、さう御遠慮なさらないでいゝのよ」

と、筧夫人もいつた。

「あなたが、學業を終へて、お國にお歸りになつたら、生涯、あゝ筧の家では、窮屈な思ひをした、とお思ひになるやうでは、私共が、申譯がないぢやありませんか。筧の家では、實に愉快だつたと、お子さまや、お孫さんたちに、しみじみ物語るやうにならなくては、ねえ、范さん」

筧夫人は、于生の茶碗に茶を注いで出しながら、微笑んだ。

「いゝえ、とんでもない」

于生はあはてた。

「そ、そんなことはございません。奥さん。私は、私は、もう感謝で一杯です。たゞ、その感謝を現はすことが出來ないだけです。」

于生は、自分の表現のまづいのが、如何にも、もどかしくて堪まらないといつたやうに、膝の上で、兩手を挘つていた。

朱美には、于生の氣持が解るやうであつた。

筧博士は、于生をじつと見てゐた眼をしばたゝいた。この青年の祖國に對する惱みが、感ぜられるやうで胸が重くなつた。

「范君」

筧博士は、莊重な調子で呼んだ。

「はツ」

于生は、兩手をしやんと膝の上に置いた。

「君は、日本の禮儀がまだ解らぬといつたな」

「はい」

「日本の禮儀の、一體、どこが解らぬといふのかね」

「どうも、まだ、何一つ自信がつきませぬ」

「日本の禮儀と君の國の禮儀と違つてゐると思ふかね」

「はい。似ているところもあり、違つたところもあると思ひます」

「なるほど。そのとほりだね。しかし、君は禮儀の本は何だと思ふ？」

「辭讓之心は禮之端也と孟子がおつしやつて居ります」

「さやう。辭讓之心ね」

「はツ」

「辭謙之心といふのは、どんな心かな」

「相手を尊敬する心です」

「そのとほりだ。だから、相手を尊敬し、相手に感謝する心で、物を言ひ、行ひをすれば禮に叶ふわけだ。禮儀三百威儀三千とあるが、要するに心だ。心のない禮儀、卽ち、心にない禮儀は無意味だらうぢやないか。君、どう思ふ？」

「はい。そのとほりだと思ひます」

「だから、心にあるとほりに、誠をもつて、素直に行へばいゝのだ。日本の禮儀と、君の國の禮儀と違つてゐるといふのは、その表現の形式だけだ。たとへば、お辭儀の仕方だな。日本では、兩手をついて體を屈める、君の國では、兩手を握り合はせて振るといつたやうにだね。しかし、その心は一つだ。相手を尊敬し、相手に感謝するといふ、根本の心は一つだ。要は、それが、誠であるか、僞りであるかにあるんだ。どうだね、范君。今日の君の國の禮儀には誠があるか、それとも僞りが多い[か]、率直に言つて見たまへ」

范は、首垂れた。誠があるといへば、自分が僞ることゝになるし、僞が多いといへば、祖國を譏ることゝなるのである。片方は、范の良心が咎めるし、他の方は、范の愛國心が許さぬのであつた。しかし、筧は師である。師に僞ることも、良心は許さない。范はほとほと困つてしまつた。范は、自分の祖國が、日本に比べて、あまりにみすぼらしい狀態にあるが故に、その祖國に對する愛國心が片意地になるのであつた。自分の祖國が、僞りに充ちてゐることをあまりによく知つてゐるが故に、僞りありといはれることが餘計、つらく、腹立たしくなるのである。范は、誰よりも、自分の祖國の人たちの僞りや、利己主義や、事大主義や、權謀術數を憎んでゐる。また日本人の正直さを羨んでもゐる。それでも、自分の口から、それをいひ出したくはないのであつた。だから筧教授から、さういふことを聞かされるのは、辱められるやうな氣になるのである。勿論、范は筧博士の誠實を知つてゐる。筧博士が支那人に對して、深い理解と同情を持つてゐることもよく知つてゐる。だから、今の場合、筧博士が、こんなことを聞くのは、自分に教へるためであつて、自分や自分の祖國を辱めるためでないことも、よく知つてゐる。しかし、そんな事情を、よく知るこゝと、自分のつらさとは全く別であつた。

范が、深く首垂れて、沈吟するのを見て、筧博士は、范の氣持を察した。

「范君。君の氣持は、よく知つてゐる。たゞ僕が君にいはんとするところはだね、日本人も、君たち支那人もだ、いやアジヤのすべての民族が、その同種性、その兄弟性に眼醒めて、ことにその共同運命性とでもいはうかな、唇齒輔車といふ語も當らないんだ。それ以上だからね。日本なくして、支那なく、アジヤが英米のものになつたら、日本もないのだ。アジヤ諸民族が、一つに塊らずには、英米の毒牙から自分を解放して、輝かしいアジヤ人のアジヤを顯現することは出來ないんだ。蔣介石が、日本を倒すことによつて、支那を完うしようといふのは、錯覺だ。何といふ不幸な錯覺であらう。范君、日本と君の祖國とは、和すれば立つ、爭へば倒れるといふ相關性のある間柄なんだよ。これを假に共同運命性と名づけよう。運命共同體といつた方が、もつと適切かも知れぬ。日本が、君の祖國の領土を奪ひ、君の祖國を倒して、日本だけが、立ち上らうといふやうな野心のないことは、近衛聲明によつて明らかだらう。君は、近衛聲明を知つてゐるね」

「はい。存じて居ります」

「君は、近衛聲明を文字通り、信じてくれるだらうね」

「信じたいと思ひますけれども從來の列強の聲明といふものが、どんなに當てにならないものであるかを見せつけられた私たちとしては、俄かに信頼出來ません」

范は、眼を輝かしていひ切つた。

「なるほど、君は、よくも、率直にいつてくれた。しかし、そこに、君たちの根本的な、重大錯覺があるんだ。君は氣づかないかね」

「何でございませう」

范は、先刻の、おどおどした、内氣やはにかみをからりと棄てゝ、むしろ挑みかゝるやうな眼で筧博士をまともに視凝めるのであつた。朱美ははつとした。今までに見たことのない、凛々しい范の一面を見たからであつた。

「日本と英米を一緒にすることが、根本的な錯覺なのだ。彼とこれとには根本理念の差がある。日本にもいろいろな缺點はあらう。しかし、日本の國柄は、僞りのあり得ない國柄なのだ。一人一人の日本人は嘘をいふこともあり得る。けれどもだ、日本は、天皇のしろしめす國なるが故に、國家としては、内[、]國民に對しても、外、列國に對しても嘘をいふことはあり得ないんだ。だから、日本國民は、絶対に國家を信ずるんだ。もし、國家が嘘をいふことが一度でもあれば、國民は國家を信ずるものではない。しかるに、日本は建國以來、萬世一系の　天皇によつて治められてゐるので、曾つて、一度も、國家が國民に嘘をいつたことがないんだよ。そこが、日本の國體の萬邦に冠絶するところであり、日本國民の愛國心の強い所以でもあるんだ。だから、日本國民は、近衛三原則をそのとほりに信じてゐるんだ。しかも、近衛聲明は、御前會議を通つたものであるから、尚更絶對なんだよ。いゝか、解つたね」

筧博士は、范を視めた[[2]](#footnote-2)。

「はい」

范は、筧の理論の論理よりも、その表情の誠實に打たれたのであつた。彼の眼からは、挑戰的な光が消えたが、それでも、氣が引立つといふことはなかつた。日本のよさが羨ましく、祖國の腑甲斐なさが悲しかつた。范の心は、支那が、日本よりも、もつともつと立派な國柄であつてほしかつたのである。

朱美は、ほつとした氣持で、范の横顔を、時々盗んで見た。范は、最近目立つてげつそりと痩せて來た。もともと蒼白な顔ではあるが、その蒼白さに萎黄の色さへ加つて來たやうであつた。朱美は、兄や弟の、延び延びした、若者らしい無關心さに引き比べて、黯然とした。祖國のありがたさ、祖國の大事さを、朱美はしみじみと感じた。

「そこでだ」

筧博士は、手で、茶卓の緣を打つた。茶碗が、茶卓の上でことりと音を出した。

「は」

范は、顔を上げた。その表情は、先刻よりも、ずつと柔いでゐた。もう、何なりと受入れます、といふやうに見えた。

「アジヤ運命共同體の諸民族が眞の禮の心に歸ることが必要だ。それが、喫緊且つ唯一の道だよ」

筧博士は、を噛んで[[3]](#footnote-3)、范の顔を視めた。

「禮の心に歸るんですか」

范は、意外だといふ面持で、眼を大きく見開いた。白味の稍多い、黑い眼である。朱美は、范の眼に、日本人的でない特色を發見した。何だか測り知れないやうな眼であると思つた。

「さうだ。アジヤ人は、禮に歸るのだ。アジヤ人はもともと禮を尚ぶ民族であつたのだ。法を無視するといふ意味ではない。法の根本が禮に置かれてあるのが、アジヤの本然の姿であつたのだ。君は、君の國の、周禮といふものを知つてゐるだらう。孔子さまも、之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てせば民無恥を免れむ、とおつしやつたね。これは次善をおつしやつたのだ。その次ぎに、孔子さまは、之を導くに禮を以てし、之を齊ふるに政を以てすれば、恥あり且つ格らむ、といはれただらう[[4]](#footnote-4)。卽ち孔子さまは、政と刑の政治を下とし、禮と政の政治を理想とされたのだ。ところが、悲しいことには、孔子さまの理想は、君の國には行はれなくて、やつと商鞅[[5]](#footnote-5)や管仲[[6]](#footnote-6)式の政治を理想としたに過ぎなかつた。これは、君のお父さんもさういつて居られる。そこへ英米の、巧智と利慾の思想が入つて、君たち知識層を風靡したんだね。そこで、禮は、君たちの祖國に於いて、地に堕ちたのだ。巧智と利慾ね。これが米英思想の眞骨頂だ。米英は、巧智と利慾を以て、まんまと君の先輩たちを釣つたんだ。釣つたんだぞ、魚を釣るやうに釣つたんだ。蔣介石一派は、今尚、鋭利な釣針を含んだ、英米の、投げる餌に喰ひつくことを以て自己を救ふ道と思つてゐるんだよ。ところが、日本は、その巧智を知らないんだ。その利慾に疎いんだ。日本人は三千年來、禮の生活を叩き込まれてゐるんだ。日本の政治には、民衆を操縦する巧知といふものがないんだ。唯、正は正、不正は不正である。國家は嘘をつかない。國民は素直に國家を信ずる。これで鍛へ上げられた日本人であるから、國際關係に於いても、正直一點張りなんだ。だから、日本はよく欺される。よく欺されるが、日本が他を欺すことが出來ないんだ。いはゆる、日本人の道義性だな。英米の奴等は、このために日本[は]御し易いと思つてゐた。ところがだね。日本人は、決して不正を容さないんだ。彼は、不正不義と思へば、劍を抜いて立ち上るのだ。利慾で立ち上る英米とは根本的に違ふんだぞ、君の國は、日本のこの根本性格を把握し損なつたんだ。そこで、眞の友人、正直な兄弟を敵に廻して、狡猾な巧智そのものゝ、英米の餌にかゝつて、支那事變といふ大不幸を惹き起したんだ。仇敵に誘はれて、兄弟に手向かつてゐるのだ。君たちは、禮に返らねばならぬ。禮の眼を通して、日本を見直せといふのだよ。かくすることによつてのみ、君の祖國も、アジヤも救はれるのだ。君たちは、日本の禮、卽ち日本の道義性をはつきり認識して、日本のいふことを素直に取ればいゝんだよ。そして、君たちは、過去の歴史に對する傲慢を棄てゝ現實の日本の優越性と指導力とを、素直に謙遜に受けいれるべきだ。君の祖國の過去の榮光は、君たちの榮光ではないぞ。それは君たちの祖先の榮光なんだ。君たちは、これから、君たち自身の榮光を、自力で築き上げねばならない。それは決して、回顧的な己惚や、現實に眼を覆ふ痩せ我慢から來るものではないのだ。己惚も我慢も、結局僞りであり愚かさだからね。ありのまゝの現實を直視することこそ、眞の勇氣だ。それが、禮なのだ。解つたかね、范君。克己復禮といつたな。アジヤ諸民族は、方に、克己復禮の自己修練を、直ちに始めねばならないんだぞ。そこからのみ、アジヤの運命共同體は、榮えるのだ。今日本が絶叫してゐる、大東亞共榮圏[[7]](#footnote-7)といふのは、これに他ならないんだ。卽ち利慾世界を打破して、禮の世界を立てようといふことなんだ。日本は眞劍なんだぞ。血を以て、この大業をやり通す覺悟なんだ。英米にして、相變らず、東洋制覇の非望を棄てざる限り、日本は、きつと、英米を破砕すべく起ち上るぞ」

「日本が英米と戰ふんですか」

范は、信ぜられないやうな顔をしてゐた。范にして見れば、日本は支那と戰つては勝つ。しかし、英米に對しては、手が出せまい、と思はれるのであつた。

「勿論！」

筧博士の聲には憤激があつた。

「日本は思ひ立つたことを、やり抜かぬといふことはないのだ。それは、義のためであつて、慾のためではないからだ。慾のためなら、慾を棄てれば、戰はずとも濟む。義は棄てられるものぢやないのだ。君は、日本の腹切りや心中のことを知つてゐるだらう。日本人は、義や人情のためには、生命をも惜まないのだ。君も、日本を知らうとなら、この點をはつきりと把握しなければいかぬ」

筧教授は、まるで叱りつける調子であつた。何故、支那人がこの日本の眞意を理解出來ないのだらう、と思ふと、血が逆流するのであつた。

「先生。ありがたうございます。よく解りました。今晩の先生のお話で、日本の姿がはつきりしたやうに思はれます。ところが悲しいことには、多くの支那人には、それが解つてゐないんです。悲しい運命だと思ひます」

范は、かういつてゐた。

筧教授は、范が、今夜の自分の話が、皆解るとは、期待しなかつた。范は、まだ若いし、また支那に通有の、日本に對しての、片意地があることを、よく知つてゐたからである。

或日、范は、夕飯が濟んで、茶が出た時に、突然

「先生、私は支那に歸ります」

といひ出した。

「何のために歸るのだ？」

筧教授は、しかし驚かなかつた。

「何のためかは、存じませぬ。たゞ、安閒としてはゐられないのです。祖國が、しきりに呼んでゐる聲が、私の耳に聞えるのです。だから、私は歸ります」

范は、沈痛な顔をしてゐた。

「でも、君のお父さんは、戰爭の濟むまで、君を俺に預けたぜ」

「先生、私は、日本精神を學びました。それによれば、父よりも祖國が大事です。だから私は歸るのです」

「歸つて、どうしようといふのだ。兵隊になつて、日本と戰ふとでもいふのか」

「それは、何とも申上げられませぬ。唯一つ申上げられることは、私は、先生に教へられたことを、身をもつて、生命をもつて、實行したいのです」

筧博士は、しばし、眼を瞑つて、范のことばの眞意を考へて見たが、考へる必要はないと思つたので

「さうか。それなら、引き止めはしない。たゞ、禮を忘れるなよ。」

と、柔らかくいつたゞけであつた。

「はい。私が、日本の眞意を、事實によつて解る日が来たら、再び、先生の門下にまゐります。先生は、總理大臣でも、政治家でもありませんから。」

范のいふことは謎のようであつたが、堂々たる國士の態度であつた。朱美は、范が、凡物でないと思つた。

「よしよし。今に君も、事實によつて、日本は嘘をいはぬといふことが解るだらう。その時には、男らしく、振舞ひたまへ」

「はい。日本といふ國が、ほんたうに、先生のおつしやるやうな國であることが解つた瞬間、私は生命を投げ出して、先生のおつしやつたことを、私の同胞に傳へます。先生、それだけは信じて下さい」

「よろしい。君を信じよう。いや君を信ずる」

かういふわけで、范は、東京を去つて、支那へ歸つたのであつた。

范は、筧博士を信じた。朱美を信じた。實に、朱美は、范の心に秘められた愛人であつた。彼は朱美に一度も自分の心持を打ち明けたことはない。しかし、范は、朱美を自分の生涯の愛人に定めてゐた。范は、日本人が眞に、筧博士の説の如くアジヤの諸民族を兄弟の如く思ひ、これを、救ふために戰ふのならば、自分の愛の申込は、朱美に受け容れられるものと信じてゐたのである。

朱美にしても、范には好意がもてた。たゞ、好きな、若い男性といふばかりでなしに、范は、何だか、支那の歴史や民族を代表した青年のやうで、無限の興味を感ずるのであつた。もし、自分が、范の妻になることによつて、大東亞共栄圏の建設に少しでも、助けになるものだつたら、自分の身も心も、范に捧げてもいゝと思つた。

范は長崎から

「いよいよ、日本の地を去ります。必らず再び先生の膝下に歸られる日のあることを希望し且つ信じます。朱美さん、どうぞ私を信じて下さい」

と、書いた、葉書が一枚來たきり、杳として消息がなかつた。

汪兆銘の南京政府が出來ても、范からは何もいつて來ない。おそらく重慶にゐるのだらうと、朱美は溜息をついた。大東亞戰が、始まり、馬來や、西南太平洋の大戰果が上り、今年に入っては、支那に於ける治外法権が撤廃され、上海は還附され、ビルマは獨立し、つい數日前、十月十四日には、比島が獨立した。日本は、筧博士が、范にいつたとほりのことを、事實をもつて證明したのであつた。

朱美は、范が

「日本の眞意が、事實によつて、證明される日が來たら、再び先生の門下に歸ります」

といつたことばを思ひ出した。

「范さんが、もし、生きてさへゐれば、きつと日本へ來るわ」

朱美は、范を信じてゐるのであつた。

しかし、菊薫る明治節が近づいても范からは、何の便りもなかつた。

この五年間の朱美一家の變化も大したものである。兄は昨年招集されて、南方前線に戰つてゐるし、弟も海の荒鷲として、つい三日前、前線へ向つて發つた。筧博士の庭の花壇の跡には、退避壕がアングリと口を開けてゐる。朱美は、母と二人で、淋しくなつた家を守つて、朝夕、出征の兄や弟の寫眞の前に花や影膳を備へてゐる。筧博士もめつきり白髪が殖えて來たし、二人の男の子を戰爭に出した、母は、ますます信仰家になつて、眞言宗の勤行や、神詣でにいそしんでゐる。

「日本は、これほどまでやるのに、支那の人たちに通じないかな」

朱美は、菊の薫を含んだ、風に吹かれながら、西北の空を眺めて、支那四億の民衆や、アジヤ諸民族を瞼に描いてゐた。

「朱美や。電報ですよ」

階下から、母の聲が響いた。

「はい」

朱美は、ガラスの雨戸を締めると、下へ驅け降りた。

「どこから」

といひながら、朱美は母から電報を受け取つて封を切つた。

「アスゴゴ一ジツクハンウセイ」

とある。

「まあ。お母さん。范さんからよ。明日午後一時着くんですつて。長崎局よ」

朱美は、胸をどきつかせながら、電文を何度も讀みかへした。

「まあ、范さんが」

筧夫人も眼を丸くした。

朱美は、無性に嬉しかつた。日本の誠實はついに、范于生といふ一人の青年の心を得たのだ。それは、やがて、十億のアジヤの心を得る手引きとなることだらう。

朱美は、范の居つた部屋を片付けたり、飾つたりしながら、父博士の歸りを待つてゐた。

1. 『綠旗』8-12、1943年12月号、76～85頁 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「視詰めた、見詰めた」の誤りと思われる。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「口を噛んで」は「唇を噛んで」の間違いと思われる。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 子曰道之以政齊之以刑民免而無恥道之以徳齊之以禮有恥且格。『論語』「これを導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てせば、民免れて恥ずることなく、之を導くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥あり且つ格らむ」。李光洙は、後半の「徳と禮」を「禮と政」にしている。 [↑](#footnote-ref-4)
5. （？～前338） 中国、戦国時代に秦の法治主義を実践した政治家。 [↑](#footnote-ref-5)
6. （？～前645） 中国、春秋時代斉の宰相として桓公を覇者たらしめた。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 小説内の時間は1938年か9年なので、1940年に登場した「大東亞共榮圏」という言葉はまだ使われていなかった。 [↑](#footnote-ref-7)